

令和 5 年 6 月 1 日現在

機関番号：32682

研究種目：挑戦的研究（萌芽）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K21636

研究課題名（和文）宗教改革と演劇—改宗者の二重の心性は、演劇をどう変えたか？

研究課題名（英文）The Reformation and The European Theatre--how did the dual mentality of converts change the drama?

研究代表者

辻 昌宏 (TSUJI, Masahiro)

明治大学・経営学部・専任教授

研究者番号：00188533

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,900,000円

研究成果の概要（和文）：近代の始まりを、フランス革命ではなく宗教改革に設定することにより、宗教改革が西欧全体を揺るがす運動であり、北欧やイングランドでは国家体制の変革が同時に生じたこと、スペインでは対抗宗教改革の中で少なからぬ改宗者や改宗者の子孫が演劇活動を担っていたこと、逆にイタリアでは、演劇活動に改宗者はほとんど見当たらず、むしろ教会関係者（枢機卿の秘書など）や宮廷人が多く含まれていることが判った。イングランドやスペインでは劇作家が誕生するが、イタリアでは劇作を担うのは宮廷人や文人という時代が続く。宗教改革の衝撃は各国の演劇活動に大きな影響を与えているが、その現れ方は大きく形も方向性も異なることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近代の定義を見直すことで、宗教改革以降の演劇と国家の宗教統制、改宗者の関係を捉え直すことができた。16世紀、17世紀においては、演劇を含む諸芸術と、国家、パトロン、宗派との関係は19世紀以降と比較してより濃密であり、演劇なり、他の芸術ジャンルを独立したジャンルとして考えることは出来ない。この時期の演劇をイングランド、フランス、スペイン、イタリアを横断して比較することにより、国、地域によって、演劇の発展のスピードが異なり、国家体制との関係も大きく相違することが判った。西欧における宗教体制が、演劇をはじめとする諸芸術に対する世界観におよぼす根源的な影響の存在を明らかにすることが出来た。

研究成果の概要（英文）：By setting the beginning of modernity not with the French Revolution but with the Protestant Reformation, it became evident that the Reformation was a movement that shook the entire Western Europe, with simultaneous changes in the national systems occurring in the Nordic countries and England. In Spain, amidst the Counter-Reformation, many converts and descendants of converts were involved in theatrical activities. Conversely, in Italy, there were hardly any converts involved in theatrical activities; instead many church officials (including secretaries to cardinals) and courtiers are involved. While professional playwrights emerged in England and Spain, Italy continued to have courtiers and men of letters involved in playwriting. The impact of the Reformation had a significant influence on theatrical activities in each country, but it became clear that the manifestation and direction of that impact were vastly different.

研究分野：英文学、イタリア文学、オペラ

キーワード：宗教改革 演劇 改宗者 コンベルソ 宗派化 神秘劇

### 1. 研究開始当初の背景

(1) オペラのリブレットの研究中に、ダ・ポンテがユダヤ教からの改宗者であり、オペラの原作者であるボーマルシェは父がプロテスタントからカトリックへの改宗者であることを知り、改宗者あるいはその子孫が、二重の心性を持つ可能性が高く、そのことと演劇との関係性に興味を持った。

(2) 特にスペインでは、改宗者のなかには表面的な改宗者であって内面は以前の信仰を保ち続ける者も少なからずあり、彼らおよびその子孫の中には演劇活動を担う者もいた。

(3) イングランドではヘンリー8世による強引な宗教改革がなされたので、エリザベス朝演劇になった劇作家には屈折した宗教意識を持った者もいるであろうと推定した。

### 2. 研究の目的

(1) 改宗者の意識の二重性(日常生活において、新たな宗派の信徒を演じることになるが、旧宗派の信仰、心性を部分的に保持している)が、彼ら自身あるいは彼らの子孫にとって演劇活動を身近にしたのではないかと考え、宗教改革以降の演劇人の中にその例を探る。

(2) 改宗がテーマ(の一部)となっている劇作品の実例を調査し、作者の宗教意識の投影され具合を明らかにする。

### 3. 研究の方法

(1) 宗教改革期およびそれ以降に活躍した劇作家の宗教的な履歴を、国別に調査する。調査対象となる国は、イタリア、フランス、イギリス、スペインである(ただしイタリアは当時のイタリア半島の諸国の意味である)。

(2) 各国の劇作のうち、宗教改革に直接・間接に関わる主題を扱っているもの、宗教改革に直接・間接に関わっていたり、迫害された劇作家の作品を取り上げ、そこに改宗者や改宗者の子孫という意識が関連しているかを分析する。

### 4. 研究成果

(1) イタリアにおいては、16世紀においては、専門の劇作家はほぼ見当たらないことがわかった。劇作を担っていたのは、宮廷人や文人が多く、外交や秘書としての仕事の合間に、劇作もしたという人がほとんどである。また、イタリアの特徴として、カトリック教会との関わりが強く、宮廷人や文人が枢機卿や司教の秘書をしている(一時的にせよ)例も少なくなかった。イタリアにおいては、宗教改革の影響は、信者がプロテスタントになったというよりも、ローマ・カトリック教会が対抗宗教改革(カトリック改革)を推進する点にあり、スペインやイングランドのように世俗的な劇場の活動が活発になることがなかった。むしろ、17世紀になってパブリックな劇場活動が盛んになったのはヴェネツィアであり、それは歌劇場としてであった。

(2) フランスでは、宗教戦争を経て対抗宗教改革へといたる17世紀前半に、演劇は国家と宗教、即ち、王権と教権のはざまにあった。バロック劇の傑作とされるジャン・ロトルーの『真説聖ジュネ』が研究分担者の奥により取り上げられた。ロトルーは若くしてオテル・ド・ブルゴーニュ座の座付き作者となった。『真説聖ジュネ』は初版が1647年で、劇中劇を用いた入れ子構造の演劇作品である。作品の外枠には、スペインのローペ・デ・ベガの『真実の見せかけ』が用いられ、劇中劇にはセロ神父作のネオラテン悲劇『殉教者アドリアヌス』が用いられている。タイトルとなっている聖ジュネは、3世紀末あるいは4世紀初めにキリスト教を説いて殉教した実在の役者である。アドリアヌスも実在の人物で、ジュネより数年後に殉教した。ジュネがアドリアヌス(アドリアン)の殉教劇を演じることは歴史的事実としてはありえず、ロトルーによる創作である。劇の舞台は異教の支配するニコメディア。ジュネ一座は、ディオクレティアン帝の皇女ヴァレリーの婚約を祝って、キリスト教を信じて殉教したアドリアンの悲劇を上演することにする(劇中劇)。ジュネ演じるアドリアンは、皇帝の寵愛を受けた勇者だがキリスト教に改宗したため獄中にある。説得を依頼された妻ナタリーが面会にやってくるが、実は彼女自身もともとキリスト教徒であることを知り、アドリアンは勇気づけられる。死刑を宣告されたアドリアンを演じるうちに、ジュネはアドリアンになりきってしまい、「天使が私に台詞をつけている」という。皇帝に向かって「これは芝居ではなく真実だ」と語り、自分の言葉でキリスト教の神を賛美し始める。こうして芝居を演じる中で改宗したジュネは捉えられ、火刑台にかけられる。ヴァレリーを慰めるマキシマンは「彼(ジュネ)は死ぬことで、演技(見せかけ)を真実にしたかったので」と幕となる。見せかけと真実といった二項対立を極限まで行使したバロック演劇の傑作であるが、ここには改宗・殉教を目撃する(演劇作品としてではあるのだが)ことで、自ら改宗にいたる人物が描かれているわけで、時代は古代ローマに設定され、異教とキリスト教の対立が描かれているが、17世紀の観客がそれをカトリックとプロテスタントに置き換えて解釈したことは疑いない。見せかけと真実は、宗教改革期以降、演劇を通底する一大テーマとなっている。

(3) スペインに関しては、17世紀におけるコンベルソ劇作家と聖人劇、具体的には、アントニオ・エンリケス＝ゴメスの作品が、研究分担者の仮屋浩子氏により取り上げられ、分析対象となった。アントニオ・エンリケス＝ゴメスの作品は『殉教者、セビーリヤの王、聖ヘルメネギルド』

を取り上げたが、この作品では、西ゴート王国時代に王レオビギルドに反乱を起こしたヘルメネギルドの殉教が扱われている。作者のアントニオ・エンリケス＝ゴメスは劇作家、詩人、諷刺作家でコンベルソ（ユダヤ教からカトリックに改宗した者）であったと言われている。また隠れユダヤ教徒であることを疑われ、異端審問にかけられた彼は、一時期フランスに亡命し、その後スペインに戻った。彼は1600年にスペインのクエンカで生まれ、父親はポルトガル系のコンベルソ、母親のイサベル・ゴメスは旧キリスト教徒であった。父方の祖父は異端審問で火刑に処され、父親も異端審問に告発され財産を没収され、フランスのナントで亡命生活を送ることとなった。アントニオ本人は1629年頃からマドリッドで劇作で活躍し始めたが、異端審問所からも告発される危機感を感じて1636年頃からフランスに逃れ亡命生活を送った。1649年に祖国に帰国する際には、マドリッドには帰らずセビーリャに赴き、かつ、名前をフェルナンド・デ・サラテと変えて創作を再開した。1651年に彼および彼の父親の像が火刑に処された。不在の者や既に死んでいる者が異端審問にかけられた場合にはこうした処刑方法が採られるのが常だった。しかしおよそ10年後に彼の身元が判明し、投獄され、1663年に獄中死を遂げた。彼は、実生活において、旧キリスト教徒と結びつき、異端審問官と近い関係を結ぶことによって、見せかけ対現実の矛盾を生き抜くという経験を続けた。彼の妻イサベル・バスルトは旧キリスト教徒であり、彼女の兄弟は異端審問官であったのだ。従来は、アントニオ・エンリケス＝ゴメスとフェルナンド・デ・サラテは別人と考えられていたが、近年の研究によって二人が同一人物であることがほぼ確実視されるようになった。劇の主題となっているヘルメネギルド（西ゴート王レオビギルドの子）は国教であるキリスト教アリウス派を信じてきたが、カトリック教徒の妻と、セビーリャの大司教レアンデルスの影響でカトリックに改宗し、反乱を起こし、幽閉され、処刑される。こうした人物が対抗宗教改革期である16世紀末に脚光を浴び、彼の聖遺物がエル・エスコリアルに移され、フェリペ2世の希望により、殉教者として認められ教皇シクストゥス5世により彼への信仰がスペイン全土で認められた。フェリペ2世は、ヘルメネギルドを通じ、ハプスブルク家と西ゴート王国の繋がりをつけることでスペインという君主国の神聖化を促進しようと考えた。1639年教皇ウルバヌス8世によりヘルメネギルドは列聖され、改宗者の守護聖人となった。まさに国家体制と改宗者の物語が鮮明に結合した例である。

(4) イングランドの演劇に関しては、研究分担者の道家英穂により、アントニー・マンディ作の『サー・トマス・モア』が取り上げられた。トマス・モアはヘンリー8世による英国国教会樹立に反対し殉教した人物であるが、作者アントニー・マンディは、カトリック弾圧に積極的に加担した人物であった。この作品では当局への忖度が随所に見られる。一つは国王ヘンリー8世が登場しない点であり、第四幕において枢密院のメンバーが国王の書状へ署名を求められる場面があるが、書状の内容は伏せられている。これは継承法について触れたもので、王の再婚相手アン・プリングが生む子どもに継承権を与えるものであった。この作品は、祝典局長エドモンド・ティルニーによる検閲をへており、実際に削除命令が出されている部分がある。作者マンディの経歴を見ると、最初はカトリックに共鳴する出版業者の徒弟になっているのだが、その後友人とフランス、イタリアに赴き、ローマのイングリッシュ・コレッジ（聖職者養成学校）に滞在している。しかし帰国後、カトリックを弾圧したりチャード・トプクリフに仕えた。イギリスに来て捕らえられたチャンピオンらイエズス会宣教師の裁判で証言し、彼らを告発するパンフレットを書いている。マンディは、ローマ留学の際には、カトリックシンパのオックスフォード伯がパトロンとなっているのだが、1578-81年のエリザベス女王の縁談（アンジュー公フランソワが相手）の賛成派だったオックスフォード伯が失脚したのを機に、マンディが反カトリックに転向した可能性がある。マンディの著した『イギリスのローマ生活』からは帰国前から幻滅していたとも取れるがこれも転向後に自己の立場を弁護するものとも解釈できる。以上の事情からマンディは「信頼できない語り手」であるわけだが、宗教改革期には、こうした「信頼できない語り手」とならざるを得ない者が少なからずいたことが推測される。戯曲は構造上、多数の登場人物、多数の声を通じて表現する形態なので、作者の考えをある人物に仮託させても、その人物以外の立場が作者の考えであるという言い訳が成り立つので、ストレートに自分の信条を吐露するのが危険な時代には好都合な媒体であったと言える。

(5) イタリアの戯曲の特殊な例として、研究代表者の辻昌宏によりジョルダナーノ・ブルーノの喜劇『カンデライオ』が取り上げられた。ブルーノは1548年生まれでドメニコ会士になったのだが、1576年にはカトリック教会の方針に反対し飛び出し、78年にはジュネーヴでカルヴァン派と親しく交わり、79年にはフランスへ渡り喜劇『カンデライオ』を書いた。83年にはイングランドへ渡りオックスフォード大で自説を論じた。ブルーノ自身は相対主義的立場から複数の宗派を受け入れる考えを持ち、この後モルター派のヴィッテンベルクの大学で85年から88年まで教鞭を執っている。しかし久しぶりに戻ったイタリアで告発を受け8年の裁判の後ローマで火刑に処された。『カンデライオ』はフランス時代に出版されたブルーノ唯一の喜劇だが、本文に入るまでの前口上、献辞が複雑で、まず、詩人への呼びかけ、次にある夫人への献辞（誰に献呈してかわからないという内容で、ペトルルカ風の優雅な文体を挿入）、「喜劇の議論と構成」、「反・前口上」、「前・前口上」最後に「守衛」の楽屋落ち的な口上となっている。この構成は、前口上3つと、それぞれにパロディー的であることから、喜劇の相対化、対抗宗教改革の情勢下でこれまでの喜劇が不可能となったことを示している。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 辻 昌宏	4. 巻 554
2. 論文標題 ハムレットはエリザベス女王を密かに表象していたのではないか？	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 明治大学教養論集	6. 最初と最後の頁 23 - 62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 道家 英穂	4. 巻 110
2. 論文標題 殉教と順応主義—アントニー・マンディと『サー・トマス・モア』	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 専修人文論集	6. 最初と最後の頁 1 - 26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 新谷 崇	4. 巻 なし
2. 論文標題 イタリアの歴史研究における「グレーゾーン」概念—議論の整理と今後の展望	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 三菱財団人文科学研究助成報告書	6. 最初と最後の頁 43 - 54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 仮屋 浩子	4. 巻 558
2. 論文標題 『殉教者、セビーリアの王、聖ヘルメネギルド』におけるアントニオ・エンリケス＝ゴメスの二面性	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 明治大学教養論集	6. 最初と最後の頁 163 - 181
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 奥 香織	4. 巻 36
2. 論文標題 道化の演技と奇なる世界ー1720年代パリの定期市芝居とアルルカンの身体ー	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本18世紀学会年報	6. 最初と最後の頁 27 - 42
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kaori Oku	4. 巻 292
2. 論文標題 La Comedie-Francaise au XVIIIe siecle : les privileges publics et leurs contreparties	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Revue d'histoire du theatre	6. 最初と最後の頁 19 - 28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 道家英穂	4. 巻 第7号
2. 論文標題 『タラバ、悪を滅ぼす者』と「クブラ・カーン」の異国表象	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東北ロマン主義研究	6. 最初と最後の頁 1 - 15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 新谷 崇	4. 巻 32 (1)
2. 論文標題 パンと祖国：ファシズムの小麦戦争	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 言語文化研究 (立命館大学)	6. 最初と最後の頁 23 - 37
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 新谷 崇	4. 巻 2019年度
2. 論文標題 新設科目「歴史総合」における歴史教育の課題と展望：グローバル化の時代の外国史学習の意義	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 茨城大学全学教職センター研究報告	6. 最初と最後の頁 67 - 80
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 新谷 崇	4. 巻 88
2. 論文標題 歴史学会第44回大会参加記	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 史潮	6. 最初と最後の頁 85 - 89
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 辻 昌宏	4. 巻 第88冊
2. 論文標題 W.H. オーデン、イシャーウッドの中国旅行と思想的・宗教的転回	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 明治大学人文科学研究所紀要	6. 最初と最後の頁 117 - 133
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 辻 昌宏
2. 発表標題 コロナ禍における伊・独・奥の歌劇場
3. 学会等名 イタリア近現代史研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 飯屋浩子
2. 発表標題 Comedia de Santos. El caso de San Hermenegildo
3. 学会等名 CILH (Congreso Internacional de Literature Hispa'nica (国際学会))
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 道家英穂、鈴木美津子、田吹長彦
2. 発表標題 シンポジウム「ロマン主義に見る異国表象」
3. 学会等名 東北ロマン主義文学・文化研究会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 丸本隆、嶋内博愛、添田里子、中村仁、森佳子、奥香織、平野恵美子、東晴美、佐和田敬司、小林佳織、落合美聡	4. 発行年 2022年
2. 出版社 森話社	5. 総ページ数 536
3. 書名 パリ・オペラ座とグランド・オペラ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	奥 香織  (Oku Kaori)  (30580427)	明治大学・文学部・専任准教授   (32682)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	新谷 崇  (Araya Takashi)  (30755517)	茨城大学・教育学部・助教    (12101)	
研究分担者	飯屋 浩子  (Kariya Hiroko)  (50440136)	明治大学・政治経済学部・専任准教授    (32682)	
研究分担者	道家 英穂  (Doke Hideo)  (70198000)	専修大学・文学部・教授    (32634)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関